

「優しい少年」にみるコミュニティにおける 「共生」への可能性

倉橋洋子

はじめに

「優しい少年」(“The Gentle Boy”)は、1832年に『トークン』(*The Token*)に発表され、1837年に『トワイズ・トールズ・テールズ』(*Twice-Told Tales*)に再版された19世紀の作家、ナサニエル・ホーソーン(Nathaniel Hawthorne)の短編小説である。ピューリタンのクエーカー教徒迫害を描いた「優しい少年」は、これまでに多方面にわたる批評がなされてきた。1950年代にRoy R. Maleは、この作品のテーマは家[home]探しの困難さ、つまり、「アメリカにおいて宗教的差別のない豊かな宗教的経験を見つけることの困難さ」であるとしている(45)。60年代に多くの批評が出た中でFrederick Crewsは、「優しい少年」はピューリタンとクエーカー教徒との心理的対立、すなわちピューリタンのサディズムに対してすすんで殉教者になるクエーカー教徒のマゾヒズムを指摘した心理学的批評を展開している。Terence Martinは、ピューリタンとクエーカー教徒の存在がそれぞれの特徴、厳しさとファナティシズムを示しているとしている。90年代にMichael J. Colacurcioは、Maleの言葉を引用しつつ、ホーソーンはピューリタンが「道徳性の惨めな歪み」を生み出していると感じていたと分析している(161)。最近では、Larry J. Reynoldsがピューリタンのファナティシズムは、政治的リーダーや彼らに導かれた人々に具現化される時に不愉快であるとし、ジョン・エンディコット(John Endicott)に言及している(60-61)。

「優しい少年」において無垢で無抵抗の少年、イルブラヒムは、Reynoldsが指摘しているようにニューイングランドのピューリタン、特にピューリタンの指導者のクエーカー教徒に対する不寛容から生じる宗教的迫害の犠牲者である。また、Allison Eastonが「イルブラヒムへの反応が登場人物や読者にとって道徳の試金石になる」と指摘しているように(39)、イルブラヒムの無垢や無抵抗は、

ピューリタンのコミュニティの迫害と垣間見られる人間性、子供たちの悪意、イルブラヒムの養父母となるトビアスの「哀れみの心」(9:73)、ドロシーの母性、実母キャサリンの狂信と母性の復活等を際立させている。¹さらに、イルブラヒムという名前はアブラハムを連想させ、本来の宗教心とは何かについて考えさせる役割も担っている。本稿では、人間性や本来の宗教心とは何かということを念頭に「優しい少年」を考察し、イルブラヒムやキャサリンに対するコミュニティの人々の反応の中に、従来指摘されてこなかったピューリタンのコミュニティにおけるクエーカー教徒との共生の萌芽を読み取る。

第1章 ピューリタンのコミュニティの指導者

「優しい少年」によれば、1656年にクエーカー教徒が「内なる神の啓示」に導かれてニューイングランドに現れた。クエーカー教は1650年代にジョージ・フォックス(George Fox)により、英国で創立された宗教グループであるが、教会の制度や儀式化に反対であったためにオリバー・クロムウェル(Oliver Cromwell)の元で迫害を受け、1650年代に英国を離れた。しかし、1659年にマサチューセッツ湾植民地では、ボストンコモンにおいて2人のクエーカー教徒が公開処刑された。それは、1658年末にクエーカー教徒はマサチューセッツ湾植民地の住人でなくても、その管区で見つけられたら逮捕され、留置され、死刑もあり得ることが法律で制定されたことによる。その時マサチューセッツ湾植民地の知事であったエンディコットに関して、「優しい少年」では下記のように酷評されている。

拭っても拭い切れない血の汚れが、この裁決に同意した全ての人の手に染みついてるとはいえ、恐ろしい責任の大半はやはり当時政府の長であった人に帰せられるべきだ。(9:69)

「狭量で教育も十分でない人物」と作品で記されたエンディコットは(9:69)、ホーソーンの「ハッチンソン夫人」(“Mrs. Hutchinson”)にも登場している。当時、エンディコットは軍人のリーダーで、ハッチンソン夫人の1637年の民事裁判

の席に、知事のジョン・ウィンスロップ (John Winthrop) とともに同席した。結局、ハッチンソン夫人はアンティノミアニズムであるとされ、マサチューセッツ湾植民地から追放された。およそ 20 年を得ても、知事となったエンディコットがリーダーとして実権を握っているマサチューセッツ湾植民地の狭量な体質は変わっていない。

もっとも、Reynolds も指摘しているように、「エンディコットと赤い十字」(“Endicott and the Red Cross”)においてエンディコットは称えられている。英国王のチャールズ I 世と英国の宗教に支配権を握っていたカンタベリー大司教ロードが、総督をニューイングランドに送ろうとした時、エンディコットはニューイングランドの旗から赤い十字を引き裂いた。そのことにより「われらの父祖が成し遂げたあの解放の戦いの最初の兆がみえてくる」ために、「エンディコットの名前よ、永遠に栄光に包まれてあれ」と称えられている (9:441)。また、エンディコットが知事であった 1644 年に、フランス領植民地との間に平和条約が締結されたとき、「おじいさんの椅子」(“Grandfather's Chair”)では、「マサチューセッツ、ニューイングランド全体は本国から独立していたかのようであった」と (6:34)、植民地時代の自主独立が語られている。² ホーソーンは、政治的指導者であるエンディコットが宗教的に不寛容で残酷であることに対して厳しく批判しているものの、英国からの支配に対して抵抗を示すことは評価しているのである。

「優しい少年」において、コミュニティの精神的な指導者である牧師も不寛容である。牧師はコミュニティに対してクエーカー教の誤りを指摘し、クエーカー教徒と関わりを持たぬよう指導している。若い頃、牧師は国教会の改革と宗教統一を図ろうとした大司教によるピューリタン迫害を体験し、その戒めに不平を漏らしていたが、クエーカー教徒の死刑を是認している。牧師は、クエーカー教徒の子供を引き取ったピューリタンのトビアス・ピアソンとドロシー・ピアソンの夫婦を念頭においているかのように、クエーカー教徒に対する「慈悲の心の危険性」[the danger of pity] について語る様子が、下記のように描写されている (9:80)。

牧師は、最近この植民地で取られた処置に触れ、神を恐れる偉い方々が、

とうとう執行せざるをえなくなった正しく厳しい裁きに疑いをさしはさまないようにと気の弱い聴衆にむかって注意を促した。慈悲の心の危険性についても語り、慈悲の心を持つことは、場合によっては称賛にあたいするキリスト教徒に相応しい美徳であるが、この邪悪な宗派にはあてはまらないとした。(9:80)

さらに、牧師はコミュニティの人々に対してクエーカー教徒を「改宗」させようとするのは危険であると説く(9:80)。すなわち、クエーカー教徒に関わらないようにと説くのである。宗教の指導者にこのように導かれた「気の弱い聴衆」が反論することはなく(9:80)、牧師に対して賛同を示す。ホーソーンは牧師の説教に言及することで、エンディコットに続き、ここでもコミュニティの指導者である牧師の影響、しいては責任を追及している。

1661年にチャールズ二世(Charles II)は、マサチューセッツにおいてクエーカー教徒であるからといって死刑に処すことを禁止したために、死刑以外の罰が続いた。このことは、教会の制度や儀式化に反対であったクエーカー教を認めたらば、未熟なコミュニティが政治的、および宗教的に不安定になることを植民地の指導者が恐れたためである。

森本もニューイングランドのピューリタンの不寛容について、彼らは「新社会建設が本国への政治的な反逆行為」と受け取られないよう注意を払っており、「バプテストやクエーカーに対する彼らの不寛容の理由として最初にあげられるのは、まさにこの政治的不安定という初期要因である」と論じている(168)。

第2章 トビアスの「哀れみの心」とドロシーの母性

コミュニティの指導者の存在にもかかわらず、トビアスとドロシーの夫婦はイルブラヒムの養父母となり愛情を注ぎ、彼に家を与える特別な存在になる。イルブラヒムの父親は1659年に処刑され、母親は荒野に追放されていた。子供を亡くしたピューリタンの移民であるトビアスは、「悲しみと恐怖」と空腹に包まれたイルブラヒムを父親の塚のところで見つけると(9:72)、食べ物とベッドを分け与えることを申し出る。しかし、迫害を経験してきたイルブラヒムには、生きてい

る人間の心よりも、亡くなった父親の方が暖かく思われるために、父親の塚の他に自分の家はないと思っている。そのようなイブラヒムがトビアスの家に着いた時、「家」[home]という言葉聞いて彼の体に戦慄が走るのは、諦めていた家が現実のものになるからである (9:74)。

しかし、トビアスの気持ちも一図ではない。トビアスは、イブラヒムから「父親は、皆が憎んでいる人の仲間であった」と聞かされると (9:72)、握っていたイブラヒムの手を「忌まわしい蛇」[a loathsome reptile] に触っていたかのように思わず離す(9:73)。この時、トビアスのクエーカー教徒に対する感情は、クエーカー教徒を迫害しているピューリタンのコミュニティの感情と一致する。もっとも、クエーカー教徒に対する「宗教的偏見」[religious prejudice] よりも、幼い子供に対する「哀れみの心」[a compassionate heart] の方がまさっていたトビアスは、「この子が咎められた宗派であろうとここに置き去りにして死なせることを神は許さないであろう」と思う (9:73)。イブラヒムを家に連れて帰ったトビアスは、「いかに自分の心が、内なる声 [the speaking of an inward voice] のように、子供を連れて帰り、親切にするようにと促したか」を妻に語る (9:75)。イブラヒムには人間の情を動かす力があり、トビアスの心を掻き立てたのである。

トビアスは英国ではクロムウェルの元で議会軍に所属していたが、指揮官の野心が明らかになると経済的理由もあり、マサチューセッツ湾植民地に移住した。彼には多くの子供がいたが、移民後、皆亡くなってしまった。トビアスがイブラヒムを引きとった理由には、自分の子供が亡くなったあとの心の隙間を埋めるためということもあるが、子供を置き去りにすることはできないという「哀れみの心」があったからである。

イブラヒムを引き取ったピアソン夫妻は、ピューリタンのコミュニティにおいて迫害される側になる。友人でさえ「冷たい眼差し」を投げかけ、友人でない者からは「非難と嘲笑的」にされる (9:77)。そのためトビアスは妻のドロシーと異なり、アンビバレントな精神状態に陥る。Colacurcio はトビアスの「哀れみの心」を認めつつも、トビアスの慈善は「冷たく、ゆっくり」[cold and slow] で (164)、道徳的立場に問題があるようだと言っている (165)。また、Crews はトビアスがノイローゼの「善きサマリア人」であると評している (67)。このようにト

トビアスが批評されるのは、トビアスはその後クエーカー教に対する感情が和らぎ、好意が芽生えるものの、それと同時にクエーカー教徒の教義と行動に対して軽蔑も抱くからである。トビアスは、ピューリタンのコミュニティのクエーカー教徒に対する評価の呪縛から完全には解かれず、クエーカー教に対して好意を持っている自分自身をも侮蔑し、アンビバレントな迷路に入り込む。その前兆は、「忌まわしい蛇」に触っていたかのようにイルブラヒムの手から自分の手を引っ込めた時に表れていた。

一方、ドロシーはトビアスがイルブラヒムを家に連れ帰った時から迷いがなく、イルブラヒムの母親になる決意ができていく。トビアスとの覚悟の違いは、キャサリンがピューリタンの集会場に現れた時にも明らかである。ドロシーは集会場のみんなが聞いている前で「自分が母親になる」ことを公言する(9:85)。しかし、トビアスは「罪悪感のような感情」[a certain feeling like the consciousness of guilt]に抑圧されたために、父親として前に出られない。トビアスの「罪悪感のような感情」とは、クエーカー教徒の子供を養育していることに対する感情である。キャサリンに言われてようやく前に出てきたトビアスは、優柔不断さや落ちつかない様相を呈している。

このようなトビアスは自分自身に迷いがあるものの、コミュニティからの迫害に耐え、ドロシーは母性を示し、変わらぬ愛情をイルブラヒムに注ぐ点において、彼らはピューリタンのコミュニティや指導者とは異なる。彼らには、異なる宗教に対して寛容な精神があり、ピューリタンのコミュニティの中で最初にクエーカー教徒と共生が可能であることを示している。実際、ピアソン一家はキャサリンを受け入れ、クエーカー教徒の老人とも交流をするようになる。

第3章 イルブラヒムに対するコミュニティの反応

ピューリタンのコミュニティは、トビアスとドロシーの夫婦に引き取られたイルブラヒムに対する関心や同情が皆無というわけではない。牧師は最初からクエーカー教徒に関わらないようにと説くが、ピューリタンの人々の中にはイルブラヒムに近づき自分たちの考えに同化させようとする者もいる。コミュニティのイルブラヒムへの反感が強まるのは、イルブラヒムにクエーカー教の教えの誤り

を納得させようとするも、うまくいかないことがある。彼らは失敗するが、イルブラヒムに近づくことは、イルブラヒムへの関心の表れである。

また、コミュニティの人々の人間としての情は、イルブラヒムと母親が再会する集会場の場面で示される。イルブラヒムが亡くなったと思った母親のキャサリンは、ピューリタンの集会場にやって来て説教壇に登り、「悪魔のような辛辣さ」を帯びてクエーカー教徒の迫害を語る(9:81)。彼女は、鞭打ち、投獄、死刑などの罰を覚悟で使命を果たしに集会場に來たのである。ピューリタンの人々はキャサリンの激しさにあっけにとられて茫然自失の状態に陥るも、彼女が死刑を宣告されたが荒野に追放になった女性とわかると、「みんなの目は彼女の死を考えて曇る」(9:83)。特に、ピューリタンの人々は、再会したキャサリンとイルブラヒム、母と子供の状況に同情心を示す。キャサリンはイルブラヒムに再会したことで母性が戻ると、自分の狂信のせいで子供が迫害に会ったことを悔いる。すると、下記のようにそこにいた女も男も心が動かされ、涙を流さずにはおられない。

低くとぎれとぎれのうめき声はキャサリンの心の苦しみの声だった。それは無意識に湧きでる同情心を罪と誤解するような人の心の琴線にも触れずにはおかない。啜り泣きがその集会場の女性の席から聞こえ、父親である男たちはみな手で目を被った。(9:85)

「無意識に湧きでる同情心を罪と誤解するような人の心の琴線にも触れずにはおかない」という表現は、2つのことを内包している。1つは「無意識に湧きでる同情心を罪と誤解する」ように人々は牧師に導かれてきたことであり、もう1つはそれでも人間としての情により母子の再会と別離が「心の琴線に触れずにはおかない」ということである。ここに、コミュニティの指導者の言質にも関わらず、人々はキャサリンとイルブラヒムを自分たちと同じ感情をもった人間と認め、人間の情を回復することができる可能性があることが示されている。さらに、トビアスとドロシーにイルブラヒムを預けることにしたキャサリンを捉えようと戸口にいた男たちは、身を引いて彼女が外に出るのを許し、「憐憫の情が宗教的憎悪に打ち勝った」〔A general sentiment of pity overcame the virulence of religious

hatred.] (9:87)。

ところが、コミュニティの子供たちは、イルブラヒムに対して残酷である。トビラスとドロシーに引き取られたイルブラヒムは心を開くようになり、子どもたちの愛を得たいと望むものの、ピューリタンの集会場では「小さな子供たちののしりの声」[the reviling voices of the little children] さえ聞こえてくる(9:78)。イルブラヒムは傷つくが、下記のように無垢で無抵抗である。

悪意に関して、それは一般的に感受性の過多に伴うが、イルブラヒムには全くない。踏まれても仕返しをしようとしめない。傷つけば死ぬしかない。彼の心は自分を支える精神力に欠けている。自分よりも強い何かに優美に巻きつく植物である。しかし、もし、はねつけられ、引き裂かれたら、地面に枯れる以外選択肢がないのだ。(9:89)

同世代の子供たちは、「両親と同じ敵意をもっている」とイルブラヒムには感じられ、心を痛める(9:90)。大人からイルブラヒムを「憎むようにと教えられた子供たち」は、決して彼に愛情を示さない(9:90)。それは、教会や政治の指導者の教えは、大人から子供へと伝播し、子供は忠実に大人の教えを守り、差別や偏見へと繋がっていく好例になっている。

イルブラヒムを最も傷つけるのは、ドロシーとともに世話をしたコミュニティの子供が、イルブラヒムの彼への愛情にもかかわらず裏切ることである。ある日、イルブラヒムは子供たちの中にその世話をした子供がいたので、「愛情を示してあるのだからもはや彼らの社会から拒絶される恐れはない」と自信を持って近づくと、「父親の心に巣食う悪魔」[the devil of their fathers] に憑りつかれた子供たちは(9:92)、イルブラヒムに襲いかかる。その世話をされた子供は、イルブラヒムを助けるような言葉を投げかけ、イルブラヒムが近づくと、杖で彼の口元を激しく殴りつけ、踏みつけ、髪を握って引きずり回す。残忍なその子供は、イルブラヒムを「殉教者」にするほど暴行を加えることで、イルブラヒムの愛情を裏切る(9:92)。彼は、仲間ではないことをイルブラヒムに思い知らせ、友人にも示しているかのようなようである。クエーカー教徒を迫害する大人を見ている子供たちに

罪悪感はなく、もっと悪いことに限度を知らない子供特有の残忍さでイルブラヒムを集団暴行する。

イルブラヒムは、ピューリタンの子供により心身ともに傷つき、それが原因で亡くなり、父と同様に殉教者になってしまう。イルブラヒムが母親のキャサリンと異なるのは、母親はピューリタン社会に受け入れられたいという望みはないが、彼は同世代の子供たちに受け入れられたいという願望があった。わずかな救いは、この騒ぎを聞きつけた近所の数人の大人がイルブラヒムを助け出し、ピアソン家まで運ぶことである。近所の大人には、まだ人間としての情け、人間性が残っていることが慰めである。もっとも、大人の真似をする子供は、今はイルブラヒムを受け入れる余地は全くないが、大人が変化すれば大人を真似て変化する可能性もある。

第4章 コミュニティにおける共生への可能性

イルブラヒムは、キャサリン一家がクエーカー教をトルコまで伝道に行った時に生まれた。そこでは皇帝でさえ彼らに「優しい顔」を向けてくれた(9:88)。イルブラヒムの名前は、トルコのクエーカー教徒に対する扱いの「感謝の印」である(9:88)。イルブラヒムは、イスラム教圏の男子の名前であるが、『旧約聖書』に登場するアブラハムのアラビア語名である。アブラハムは、ユダヤ教・キリスト教・イスラム教を信じるいわゆる啓典の民の始祖と言われており、『旧約聖書』の「創世記」の12章から25章において記されている。

Colacurcio も、イルブラヒムはアブラハムを思い出させると指摘しているように(167)、イルブラヒムが無垢で無抵抗であるがゆえに、アブラハムとしての作品中の役割が浮き彫りになる。イルブラヒムの存在は、クエーカー教徒が一方的に耐えることを語っているのではなく、イルブラヒムを通して狂信的なクエーカー教徒とそれを迫害するピューリタンの両者が本来の宗教心に立ち返ることを暗示していると思われる。

本来の宗教心とは、試練に耐えきれず嘆くトビアスに対してクエーカー教徒の老人が語る次の引用に読み取れる。

あなたは良心のために、喜んで全てを与え、全てに耐えるつもりじゃないのかね。あなたの信仰が純化され、心が世俗の欲望と思い切れるように、並みはずれた試練をも望んでいるのではないのかね。(9:96)

ホーソーンはクエーカー教に対する見解を、「優しい少年」よりも後に書かれた「メイン・ストリート」(“Main Street”)において、彼らは「新しい考え」を授かったと以下のように述べている。

放浪する人たちは、天賦の才能を授かった。それはどんな時代においても、道徳的な苦難と迫害、嘲笑、敵意、そして死をも含むペナルティをもたらしてしまう才能である。それを有するものにとってかくもみじめで、それ以外のすべての人間から強い敵意をかってしまう。何となれば、その才能を前にすると、それぞれの時代の人々が苦役を持って築きあげたすべてが覆されると恐れるからである—すなわち、彼らは新しい考えを授かった。そのことは皆の目にも明らかではないか。彼らの頬から—地上の土埃にまみれてはいても、彼らの人間全体から—天与の才能の光が抑えがたくこぼれてくる。コミュニティの人たちは、これらの人々と自分たちは違う、同じ考えをする兄弟でも隣人でもないと知って震撼する。(11:68-69)

クエーカー教徒の「新しい考え」は、ピューリタンと異なるがゆえに、恐れられたのである。しかし、時がたつにつれて、クエーカー教徒に対して「もっとキリスト教徒らしい精神—寛容の精神」[a more Christian spirit—a spirit of forbearance]が広がっていったと「優しい少年」では記されている(9:104)。キャサリンに対しても老ピューリタンは、「怒りよりも哀れみの目で」[rather in pity than in wrath]彼女を見るようになる(9:104)。

おわりに

17世紀のピューリタンの未熟なコミュニティでは、指導者に導かれて本来の宗教心を忘れ、クエーカー教徒を迫害した。アブラハムを連想させる、無垢で無抵

抗なイブラヒムに対する人々の態度を「優しい少年」において描くことで、本書は原点に帰り、宗教心とは何かを考えさせる。具体的には、本書は行き過ぎたキャサリンに代表されるクエーカー教徒の狂信と、異なる宗教に対するピューリタンの狭心、迫害を描くことで、彼らのゆがんだ宗教心に疑問を投げかける。さらに「優しい少年」はそれに留まらず、宗教の異なる者とのコミュニティにおける共生の可能性も描いているのである。

注

本稿は、日本アメリカ文学会中部支部 11 月例会 (2016 年 11 月 19 日於愛知大学車道校舎) にて発表した原稿に加筆修正を加えたものである。

1. Nathaniel Hawthorne の作品からの引用は、本文中に巻数と頁数のみを括弧内に記す。
2. 倉橋洋子「ホーソーンのアメリカ独立革命観」『人と言葉と表現—英米文学を読み解く』 p. 105 参照

参考文献

- Colacurcio, Michael J. *The Province of Piety: Moral History in Hawthorne's Early Tales*. Durham: Duke UP, 1995.
- Crews, Frederick. *The Sins of the Fathers : Hawthorne's Psychological Themes*. Oxford UP, 1966.
- Easton, Allison. *The Making of the Hawthorne Subject*. Columbia: U of Missouri P, 1996.
- Male, Roy R. *Hawthorne's Tragic Vision*. New York: The Norton Library, 1957.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. William Charvat et al. 20vols. Columbus: Ohio State UP, 1962-1988.
- Reynolds, Larry J. *Devils and Rebels: The Making of Hawthorne's Damned Politics*. Ann Arbor: U of Michigan P, 2013.
- Terence, Matin. *Nathaniel Hawthorne*. New Haven: College & University P. 1965.
- 倉橋洋子「ホーソーンのアメリカ独立革命観」『人と言葉と表現—英米文学を読み解く』東海英米文学会編、学術図書出版社、2016。
- 森本あんり「中世的寛容論から見たニューイングランド社会の政治と宗教」『人文科学研究 (キリスト教と文化)』42号 2011:165 - 186. 2016年10月30日。
< <http://ci.nii.ac.jp/naid/120005416051> >

キーワード：ピューリタン、クエーカー教徒、共同体、共生
(くらはし ようこ 東海学園大学 経営学部教授)